

5 4 9

137

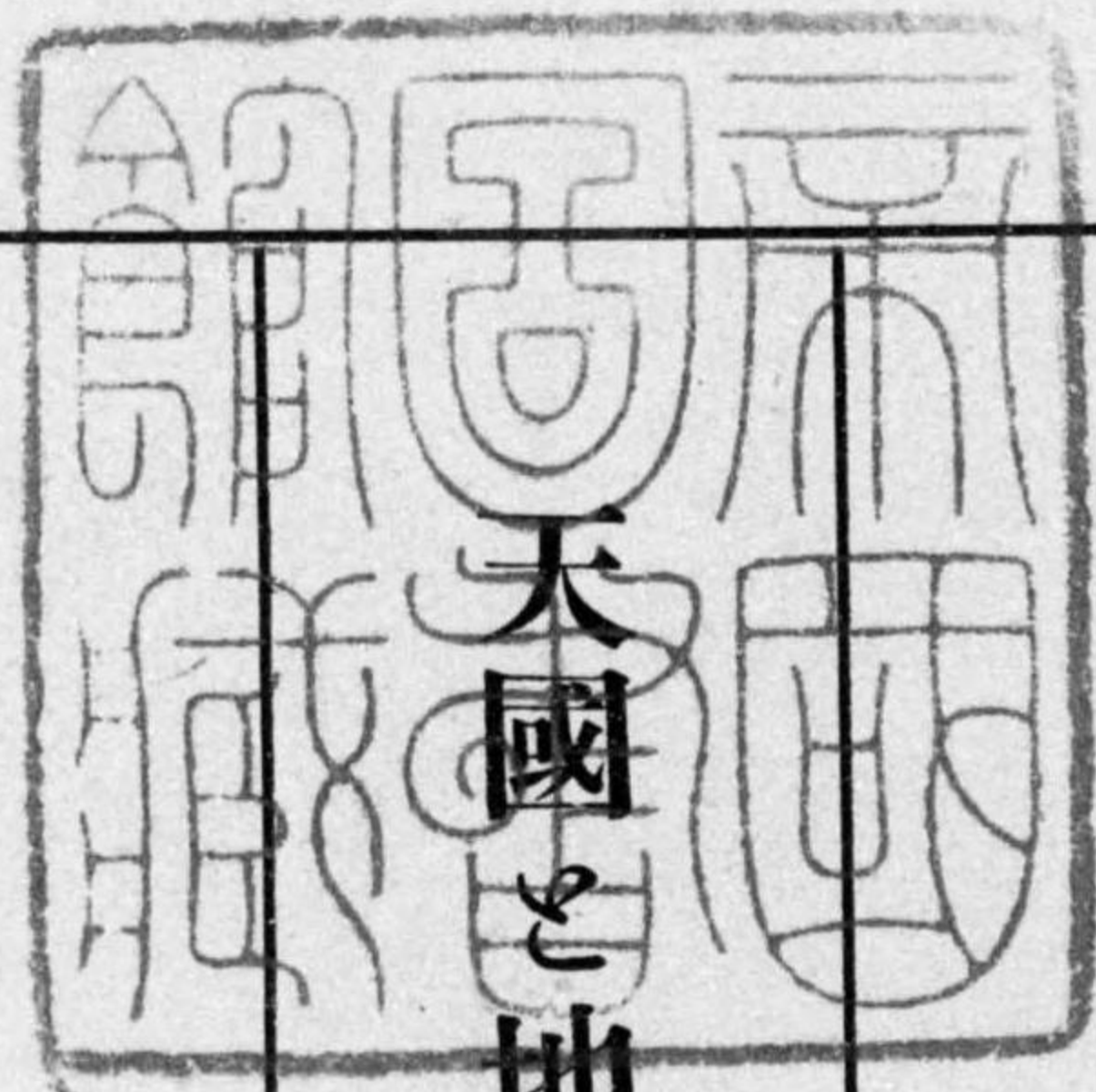


始



天國と地獄

麻生恒太郎詩集



天國と地獄

麻生恒太郎著

大正

15. 10. 16

内交

549-137

天國と地獄 目次

昨日の物語

ボオを読む女	八六
冬	一一
メリ・ゴ・ラウンド	二一
ピアノを弾く前	二四
あそび	二六
童話を聴く	二九
春夜讀詩	三三
莓の唄	三四
ボオルと井ルジニイを讀んだ晩	三六
今日あなたの笑ひは	三八
蠟	三一
鬼薦	三三
心に染まぬ結婚	三六

造化萬物何から何まで
 狭い舞臺にお並べ下さい。
 さて 落ち着きはらつてすばしこく
 天から此世へ、此世から地獄へと
 事件を運ばせてお貰ひ申しませう。
 「ファウスト」座長の詞



昨日の物語

暮春のすみれを溶かして
 コヒーに入れてのまうよ
 コヒーに入れてのまうよ
 われら昨日の物語のために

戯け涙

お笑ひ草 三苦
 五月の笛 三苦
 道化の嘆 三苦
 ビエロの冬 三苦
 無の秘密 三苦
 賢い方法 三苦
 要ばいつも 三苦
 餘技 三苦
 盗人の群 三苦

ポオを讀む女

Quoth the Raven, 'Nevermore.'
E. A. Poe

6

ひとりの美しい年上の女が
嘗つてひそかにわたしを愛した……
その頃わたしはシエリーが好きであつた。

もう顔も忘れたし名さへ思ひ出せぬ
たゞ いつもポオを讀んでゐる女であつた。

いまもその頃も

わたしのシエリー好きに變りはないが
この頃わたしにポオを讀む日が多くなつた……
わけて その女がよく口にした「大鴉^{レイヴン}」を。

それにしてもそれにしても
いつもポオを讀んでゐる女であつた……。

7

冬

N・Mに

丸髻に結つてゐるであらうあなたと
それからツルゲエネフのこの「父と子」と……。

私があなたに貸した「父と子」は
いま冬で白つぼい私の本箱に
寒々と褪せた脊の金文字を光らせる。

私のノオトに書きつけられた

二行の章句に言ふ――

秋深くして嫁ぎゆき

そののち知らず、雲する。

私の「父と子」を読んだ日のあなたは

まだ晩秋の處女であつた

けれども今は既に既に冬である

丸髻に赤いてがらが燃えるであらう。

寒いからつ風の吹き込むこの部屋に
私と「父と子」とが影のやうにちびんで
ああ 寂寥の冬よ 冬よ。

丸鬚に結つてゐるであらうあなたと
それからツルゲエネフのこの「父と子」と……。

メリ・ゴ・ラウンド
真船 浩に

缺けた月なら
満つるを待たうに。

死んだ紅雀なら
葬らつてもやらうに。

凋れた百合なら

流れに捨てやうに。

壊れた玩具おもちゃなら

又求めても來やうに。

けれどあなたは

メリ・ゴ・ラウンド。

歸つても來ない

行つてもしまはない。

さうしていつまでも
わたしを廻めぐり、

わたしを泣かせる

メリ・ゴ・ラウンド。

ピアノを弾く前

芥川龍之介氏に

—なにを？

花と花との間に頬笑んでゐる
女の眼もとに黒い小虫のやうな黒子がある。

—シヨパンを。奥様。

椅子ツツに深く埋つてゐる男の
紙煙草を挟んだ指は花瓣はなびらのやうに白い。

—ノクターン夜曲。

—どうぞ。

あそび

野口米次郎氏に

藝術を遊ばう

金泥の松。

人生は短かく

藝術も短かい。

たのしく

美しく、

大きなあそび

大きな夢を。

女人よ

胡蝶よ。

藝術は短かく

美は減びる。

滅びの中に
命をかけて、

藝術を遊ばう
金泥の鶴。

童話を聴く

夢をゆくわが船のあし。

アルベヘル・サマン(上田敏譯)

憂愁が霧のやうに襲ふ時

他愛ない童話に慰めて貰ふ私である。

机の上に四冊重ねられて

ユーゴーの「レ・ミゼラブル」がある、

しかし、今夜の憂愁な私には

それは餘りに鉛のやうで重すぎる、

読めば却つて濃い憂愁に惹入られさうだ。

——子

おまへの小さな本箱に

グリムの童話の譯本があつたね、

枕元でゆつくり読んで呉れないか、

私は臉を閉じてそれを聽かう、

そして子守唄に寢入る幼兒のやうに

何時かうとうと、眠りに落ちたい。

そう、——子、

もつとゆつくりの方がいいね

……王子さま、お姫さま

それから

鳩と

薔薇と

魔法の指輪と……。

春夜讀詩

堀口大學氏に

あなたの詩集を讀んでゐます

アネモネの花 夜の椅子……。

一篇讀んでは忘れやうと

二篇讀んでは忘れやうと。

アネモネの花 夜の椅子……

忘れたいために讀んでゐます
忘れたいために——。

あなたは理解^{わか}つて下さるでせう

アネモネの花 夜の椅子……

忘れられたものだけが美しい

忘れられたものだけがいつまでも美しい。

莓の唄

亡きD夫人に

莓は匙さじにつぶされた……

「もう昔のことです」と寂しく笑つたあなた。

やがて莓は唇くちに愛された……

「それも昔のことです」と涙ぐんだあなた。

莓 莓 また初夏が来て

今年もこの店で莓を食べる私だが
去年の莓は何處に行つたのか
去年のあなたは何處に行つたのか。

ポオルと并ルジニイ
を讀んだ晩

佐々木高明に

とうとう黄水仙は壺で枯れてしまつた
盛んな春の 美しい晩であつた。

「ポオルと并ルジニイ」を讀んで
しばし私のこゝろは慰められた。

またポオル 并ルジニイ

殖民領の空のもと

さても似合な女めをどびな夫とびな雑な……

私は扉うたにラフオルグの詩うたの一節いちせつを書いた
盛んな春の 美しい晩であつた。

けれども黄水仙は壺で枯れてしまつた

私は花をこなごなに碎くだきながら

かういふ物語ロマンに慰められる自分を悲しんだ

今日あなたの笑ひは

生田春月氏に

28

あなたは漣のやうに暖かく笑ふ

あなたは小笹のやうに冷たく笑ふ。

私はあなたと對^す坐^はつてゐて

あなたの笑ひが小窓の青空よりも

あなたの笑ひが机上の黄水仙よりも

もつと寂しい色に流れるのを見る。

あなたは私が面白い話をする

ある時は暖かく ある時は冷たく

しかし何時でも寂しい色の笑ひを

春の寂しいところに漂はせる。

あなたの笑ひは漣のやうに暖かい

あなたの笑ひは小笹のやうに冷たい。

けれど今日 あなたの暖かい笑ひも

29

けれど今日 あなたの冷たい笑ひも
共に澄める青空のやうに寂しい
共に澄める青空のやうに寂しい。

蟻

自分のために

蝸牛かたつぶりのやうに黙つてゐるがよい
蟻ひきがへるのやうに黙つてゐるがよい
蜂の針をもつのは易しいが
蜘蛛の網をもつのは易しいが
黙つて働く蟻になるのは難かしい。

鬼 蔦

Eに

昨日林に行つた時元氣な鳩よ

鬼蔦は赤かつたおまへの頬のやうに

昨日林に行つた時元氣な鳩よ

鬼蔦は赤かつたおまへの唇のやうに

だが今日おまへは病氣になつて

白い寢床に寝たきりだ笑ひも見せず。

おまへを看てゐると病んでる鳩よ

昨日の鬼蔦を思ひ出して悲しいあの鬼蔦を。

鬼蔦は今日も赤いだらう昨日のやうに

それなのにおまへの頬は唇は蒼ざめた。

ああおまへが快くなる頃は病んでる鳩よ

あの鬼蔦が枯れてゐるだらうあの鬼蔦が。

心に染まぬ結婚

〇〇に

あなたは今
指輪と結婚する。

あなたの肩は
花の匂ひに重い。

あなたの手は

奏樂に蒼白い。

そして

あなたの胸は
酒のやうに冷たい。

あなたは今
溜息ないきと結婚する。

妻

吹き消した洋燈からのぼる燵んだ花模様のやうに
レオン・ポオル・フアルダ(山内義雄氏譯)

1

部屋ぶやの隅の緑の色もあせた長椅子よ、
彈條でんまいのゆるんだ珈琲色の古時計よ、
赫く錆びてしまつた鐵の燭臺よ、
暖爐の上、壁にかゝつて埃に汚れた
あまりにも見古した「海賊」の油繪よ。

36

ああ、私はもう既に
卓上の花瓶に凋れてゐる
あの黄色い花のやうに老いてしまつた、
私は懐かしい子供時代からの家の
この広い客間の椅子によらう、
そして一本の葉巻を吸ひ盡す間を
今宵も亦愉あましい朝紅あさやけいろ色の回想にまどろまう。
その前に私は七つの窓に行つて

37

遠く丘の月の出の見えるやうに
 重い窓掛をみんな引絞らう、
 くづれかけた煖爐のかけで
 細々と啼きつゝける蟋蟀の聲も
 窓のガラスに軽く頬すりしてゆく微風も
 低い音に燃える黄色いランプの光りも
 どんなに今宵の回想を懐かしくして呉れるであらう。

さらば、私は窓際の腕椅子に腰をおろし
 チヨツキの葉巻に燐寸^{マツチ}を擦つて

しばらくわが老年に別れを告げやう。

2

若草よりも優しい午前の陽に
 私は隣りの女の子と背中を丸くして
 垣根にもたれて話し合つてゐた、
 (暮春、大空は限りなく青く——)

——犬と猫とどつちがい、？
 ——おまへは？

——あたし猫。

——ぼくは犬。

——犬は吠えつくから猫がいゝわ。

——猫は爪でひつかくから犬がいゝ。

——猫の方がいゝ。

——犬だ！

——猫！

——おだまり！

（暮春、大空は限りなく高く——）

夕暮、空が黄色に映え輝く頃

私は庭へ出てひとりぼつちで

球たまを投げては受けて遊んでゐた、

いつもなら今頃は木戸の鈴をひゞかせて

頬笑みながら走かけてくるあの子だけけれど

晝間、私の「おだまり」に唇をとがらして

怒つて歸つて行つたから今日は來ない、

投たまげた球は風を切つて高く上つてゆき

夕日に染まりながら手に落ちてくる

五度十度、球たまは上る、球たまは落ちる、

しかし球は隣りの庭へ外れて

私は「嬉しい失策」をしてしまった、

十秒、廿秒、卅秒、

私は境の扉に立つて片唾をのみ

遠くからの小さい蹙音を耳をすまして待った、

(暮春、大空は鮮やかな茜に——)

——球をかへしておくれよ。

——……。

——もういぢめないから。

——きつと？

——きつと！

——これからいぢめちや厭よ。

それから五分とた、ないうちに

私たちはもう仲なほりの手をつないで

聖者の臨終のやうに嚴かな落日を肩に

無邪氣な會話をくりかへしてゐた、

(暮春、大空は次第に水色に——)

この女の子、遠い昔の女の子、

幻燈のやうに青々と寂しい暮春の女の子、
しかしこの女の子は私の人生の伴侶となつた、
いま隣りの室に編物をしてゐるであらう妻である。

3

ああ、葉巻はとつくに白い灰になつてしまつた、
蟋蟀はいつの間にか啼き止んでしまつた、
風は影のやうに身をひそめてしまつた、
月の丘は水のやうに静けさを増した。

半ば開かれた戸口から
愛犬のフロラは音もなく入つてきて
私の足もとにうづくまつてしまつた、
ああ、フロラよ、老いたるフロラよ、
おまへにも若い時はあつたであらう、
おまへにも遠い夢はあるであらう、
フロラよ、おやすみ！
眠りは老いたる者に安らかであらう、
私もラムプを手に階段を寢室へと上るであらう、
そして寢臺のシートに疲れたこの身を横たへ

月が窓の上にかくれてしまふまで
さつきの回想を飽かず繰り返すであらう。

46

私はラムプを持つて開かれた戸口へ行つた、
ああ、そこに「わが身の如く」老いたる妻は
編みかけの靴下を膝に落したまゝ、
ラムプの消えたのも知らずに
他愛なく月の光りに眠つてゐるではないか、
妻よ、老いたる妻よ！
しかし私は彼女の眠りを醒さぬやう

そうつと戸を閉じて忍び足に去らう。

47

戯
け
涙

憂きことの繁き世や
苦しきことの満てる世や
あらず・ふあ・よりつく！
戯^{おど}け涙のみぞよきこの世や

Quem si non aliqua nocuisset,
mortuus esset.

お笑ひ草

西崎満洲郎に

とんだお笑ひ草よ 墓場のすみれだ
また今日も一人死つたのだ
いやに笑ひ上戸の曲馬團の女が！

かう毎日毎日死られちや

おつつけ地球は死骸の山だ

月夜のピラミッドだ 冷たい塔だ。

ああ やりきれない うんざりだ
たぶん明日はあいつが死る
急に化粧し出した帽子屋の小娘が！

だが とんだお笑ひ草よ 墓場のすみれだ
だれが死らうが俺さへ生きてりや
やつぱり浮世は青空だ 踊らう！

五月の笛

La mort ne saurait être plus parfait que la vie.
Anatole France

52

死ぬのはやめだ 五月の笛だ
びいひよろひよると野原へ出やう。

草に寝ころがれ みどりの夢だ
ばつたが俺の鼻先きにとまる。

大きな圓天井まるてんじやうだ 死ぬのは損だ

死ぬばこの身が疵物きずものになる。

雲が飛んでゐる 綺麗いのちな生だ
風が俺の臍へそをくすぐつてゆく。

世は楽しくなつた 五月の笛だ
びいひよろひよると野原で踊らう。

53

道化の嘆

加藤愛夫に

わたしは月夜の道化 棺屋の息子
わたしに揺籃ゆりかごの思出はない
わたしに歸つてゆく故郷ふるさとはない。

わたしの舌は大きくて赤い
わたしの身振は戯あそけてゐる
ああ わたしの涙さへが笑ひの種。

笑つて下され

わたしは月夜の道化
わたしに揺籃ゆりかごの思出はない
まあるいお月様を揺籃ゆりかごと思ふ。

泣いて下され

わたしは棺屋の息子
わたしに歸つてゆく故郷ふるさとはない
暗い墓穴を故郷ふるさとと思ふ。

ピエロの冬

Encore un de mes pierrots mort; mort d'un
chronique orphanisme. J. Laforgue

56

なにもかも冬になつてしまつた
もうおしまひだ 泣くだけだ。

ピエレットのやつも泣いてゐたつけ
なんて可笑しな泣きやうだつたらう。

窓には氷雨が噉り泣いてゐるし

とうとう冬が來てしまつた。

ああ またピエレットの家へでも行つて
まつ白に白粉を塗つてやらうか。

踊つて笑つて疲れた頃に
いつそ首でもく、つてやらうか。

なにもかも冬になつてしまつた
もうおしまひだ 死ぬだけだ。

57

無の秘密

虚空鐵船ヲ駕ス 五燈會元

あなたと

無の秘密を數へやう。

夜の哄笑

鴉の愛人。

頭骸骨しやんがうべの食卓

眞白な皿。

窰あなぐらの梯子

空からの麥酒樽。

正しい誤算

零は百。

そしてあなたの首

わたしの劍。

賢い方法

And death o: ce dead, there's no more dying then.

W. Shakespeare

60

生涯一つの戀をつゞけることが不可能なら
せめて花から花へ蜜を尋ねる蜂におなりなさい。

けれども それがあなたの御氣に召さぬなら
人生の怠屈を仕事の中にお忘れなさい
なにもかも忘れて熱中することです。

だが 一番賢い方法は

出来るだけ早くこの人世から出てゆくことだ
出来るだけ早く「御機嫌よう」を言つて出てゆくことだ。

61

要はいつも

佐藤信重に

人生には砂や臘の味もないではないか
女よ 事務と怠屈を忘れやう。

椰子樹の葉蔭 渚の獨木舟^{カヌー}

歌よ 夢よ 永^{とこ}しへに月光の林から昇れ。

醒めるな

冷たい雨にうたれて花は色褪せる

—— 要はいつも酔ひ痴^しれてゐることだ。

餘 技

鶴見英夫に

詩はわたしの餘技にすぎない
では本業は何だらう。

今日わたしは恐ろしく不機嫌だつた
でもやつぱり詩を書いて暮した。

詩はわたしの餘技にすぎない

では本業は何だらう。

かなしいことだがこの世では
わたしの本業はなささうだ。

かうして生きてゐることさへが
暇つぶしにやつてる餘技なのだ。

盗人の群

ある人々に

この村には一人も警官がゐないので
毎晩 盗人の群が出没する――。

お伽噺をいたしませう

むかしむかし亞米利加に

ホキットマンといふ詩人がゐた
宇宙の機械を 神様の奇計を

すつかり見抜いたやうな顔をして
大きな大きな法螺を吹きました。

坊ちゃん お嬢さん わかりますか？
大きな大きな法螺を吹きました。

この村にも一人も警官がゐないので
毎晩 盗人の群が出没する――。

44



天國と地獄

大正十五年九月五日印刷
大正十五年九月十日發行

【定價一圓】

著者 麻生恒太郎
發行兼印刷者 伊藤憲逸
印刷所 芳文社

發行所

東京市麻布區狸穴町廿七番地
著者方

549
137

終